

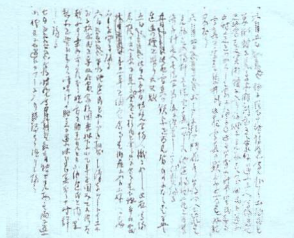
あ さ い ち ゅ う パリの浅井忠

～ パリ 到 着 の 年 ～

■浅井忠とパリ

西洋画研究のため2年間の留学の命を受け、1900（明治33）年4月17日、浅井忠はパリに到着しました。44歳の年に初めて訪れたヨーロッパの地で、何を見聞したのでしょうか。

千葉県立美術館には大学ノートに鉛筆で手書きした日記「巴里日記」、「巴里寓居日記」が残されています。到着からその年の暮れまでの様子が記されており、これらを参考にしながら浅井のパリ到着の年の活動を中心に紹介します。



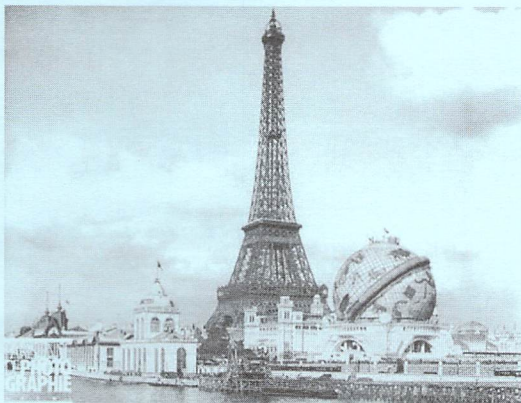
浅井忠「巴里日記」1900

■パリ万国博覧会

1900年4月15日に、パリ万国博覧会が始まりました。浅井がパリに着く2日前の開催で、11月5日に閉会したので、約2年間のパリ生活のおよそ1/3は博覧会と共にありました。

日本は法隆寺金堂を模した日本館を建設するほか、絵画や工芸品などを出品しました。浅井は事務の任命を受けて、会期中何度も会場に足を運びました。

この博覧会は、トロカデロ広場からエッフェル塔を抜け、シャン・ド・マルス公園までの直線と、グラン・パレ、プティ・パレが対面する大通りからアレクサンドル三世橋を抜けたアン・ヴァリッドまでの直線の間を会場として、参加各国による多彩な展示や催しが行われました。



1900年パリ万国博覧会の様子

■マラコフの宿と同居人

浅井はマラコフ通り（当時）に面した宿に投宿しました。部屋は三つに分かれており、日本人三人で一つずつ使いました。この宿は帰国まで活動拠点となりました。博覧会場から徒歩数分の便利な場所にあり、会場と逆方向に歩けばすぐ凱旋門に、そこからシャンゼリゼ大通りに出られました。



現在の宿の様子（2014）



宿の前の通りの様子（2014）

写真左から2番目が浅井です。右隣は宿の同居人で国文学者の池辺義象です。池辺は浅井の服装を次のように記しています。



氏は常にフロックコート、又はモーニングコートを着られ、ズボンなどはそのがら極めてじみなるものを好まれ、はでやかに目立つものを嫌われたり、履（靴のこと）は、あみあげと、ぼたんどめとの二つをかわるがわる用いられたり、帽子はシルクハットを用いられ、時々中折をもかぶられたり*1

池辺の観察は的確でした。当時パリ在住の日本人には、浅井君くらい身長があれば洋服をうまく着こなせるのに、その体格を羨ましがる者が少なくなかったそうです。写真を見る限りなるほどと思わせます。二人は気が合い、帰国後も交流は続き、よく一緒に旅行に出かけました。

■観劇

浅井は芝居好きで知られています。パリ滞在中、何度も観劇に出かけました。

5月24日、現在も活動が続ける「オランピア」へ行って予約しました。翌25日、今度は三人の婦人を伴い、観劇に訪れました。婦人たちはオランピア劇場の広さとシナリオの巧妙さに驚いていた、と記しています。

この他にも、当時人気の女優、サラ・ベルナールの舞台にも何度か出かけ、『椿姫』などを観劇しました。



オランピア劇場の外観 (2014)

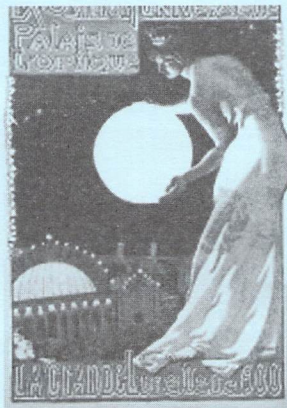
■アール・ヌーヴォー

浅井がパリで過ごした時期、アール・ヌーヴォーが流行していました。フランス語で「新しい美術」を意味するアール・ヌーヴォー (art nouveau) は、曲線を多用した、植物や女性の装飾的表現に特徴があります。

図は博覧会の公式ポスターです。左右非対称な画面構成、女性や人物の比率を変えた表現などに、アール・ヌーヴォーの特徴がよく現れています。

博覧会場では、当時パリで活動していたビングの展示も行われていました。ビングは言葉の語源になった「アール・ヌーヴォーの店」を営んでいました。

浅井はビングの店を訪問したり、博覧会場の展示を見学して、直接ビングから説明を受けました。当時流行していた美術様式の中心人物との交流は、得るものが多かったようです。



パリ万国博覧会公式ポスター



アルフォンス・ミュシャ
《1896年サロン・デ・サンポスター》



浅井忠《木かげの女》
1902-1907

後に浅井自身もアール・ヌーヴォー風の図案を手がけるようになりました。

■美術工芸への関心

もともと西洋画研究のためフランスに渡った浅井でしたが、博覧会やビングとの交流などを通して、美術工芸に強い関心を示すようになりました。浅井の日記には、美術工芸関係の工場や美術館を、度々訪れた事が記されています。

セーブル陶磁器美術館



セーブル陶磁器美術館の様子 (2014)



セーブル陶磁器美術館の展示品1898 (2014)



浅井忠《花瓶》1902-1907

セーブル焼はフランスを代表する磁器です。乳白地に豊かな彩色を施した絵画的表現による装飾を特徴とします。パリ郊外のセーブルに国立製造所があり、敷地の一部を陶磁器美術館として公開しています。収蔵作品はフランスのみならず、古今東西の陶磁器作品を収蔵しています。浅井は5月27日最初にここを訪れ、その後も数回訪れました。

この製造所はパリ万博で、アール・ヌーヴォーの様式を積極的に取り入れた陶磁器を出品しました。浅井の目には、伝統的な技術の上に、最新流行のデザインを施した美術工芸品を作る製造所と映った事でしょう。浅井は帰国後京都に移住して、京都の陶芸家と共同して陶磁器の制作を行いました。京都の伝統的な製造技術と、パリで見聞した浅井のデザインによる共同制作でしたが、セーブルの活動はこのアイデアの元になったと考えられます。

ゴブラン織物美術館



ゴブラン織物美術館の様子 (2014)

15世紀にゴブラン一家がパリに作った染織工場跡に、17世紀になってタペストリー（壁掛け）の国立工場が設置されたのが、この施設のはじまりです。ゴブラン織はフランスを代表する織物として知られています。博覧会には、アール・ヌーヴォー風装飾を取り入れた織物を出品しました。浅井は8月9日ここを見学しました。

■グレー訪問



グレーの橋 (2014)

8月に初めてグレーを訪れました。グレー＝シュル＝ロワン（Grez-sur-Loing）は、パリ南東60数Kmに位置する自然の豊かな街です。景観の美しさから、当時の日本人画家に知られていました。

フランス滞在中、浅井はここに4度訪れました。4度目は和田英作と約半年間滞在し、洋画家として充実した日々を過ごし、優れた作品を残しました。

浅井のフランス留学を大まかに分けると、一年半をパリで過ごして見聞を広め、残り半年をグレーで滞在制作したといえます。

■夏目漱石

博覧会会期中の10月、夏目漱石がマラコフの宿に浅井を訪ねました。漱石はロンドン留学の途上で、一週間ほどパリに滞在して博覧会を見学しました。この時の詳細は残念ながら日記に記されていません。

一方、浅井は帰国に当たり、フランスからロンドン

に渡り船で帰国の途につきました。ロンドンでは漱石の宿に宿泊し、一緒に街を歩いたり料理店で食事したそうです。

漱石の『三四郎』に登場する深見画伯は浅井がモデルです。『吾輩は猫である』の中・下編挿絵は、浅井が手がけました。二人は正岡子規を通じて知り合ったといわれています。

■パリでの制作



リュクサンブール公園 (2014)

リュクサンブール公園

日記によれば、パリに着いて最初に写生したのは、到着から一月半ほど経った5月19日、場所はリュクサンブール公園でした。パリ市内で最も大きなこの公園は、もともとはリュクサンブール宮殿の庭園部分でした。園内にはニューヨークに贈られた自由の女神の原像が設置されています。

《パリ公園》と題された水彩画作品があります。リュクサンブール公園を題材にしたかは断定できませんが、似た雰囲気を感じられます。

小鳥に餌をやる少女の赤いドレスと仕草が印象的です。少女の帽子、その奥の婦人の帽子、さらに奥で日傘をさした婦人の帽子を描き分けています。人物の衣服も、色、デザインを注意深く観察して描いています。浅井はパリのファッションにも関心を持っていたのかもしれません。

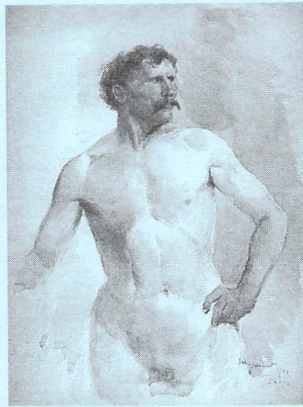


浅井忠《パリ公園》1900-1902

人物裸体習作

浅井の留学の実態は自主学習であり、画学生として美術学校に通う、というものではありませんでした。

図は、パリ滞在中に描いた水彩画《男性裸像》です。ポーズをとった男性の裸体画であることから、どこかの美術学校の講習に参加して描いたものと思われます。パリの美術学校では、課外の時間に校内のアトリエで裸体モデルの有料講座を実施していました。当時パリ在住の若い日本人画家は多く、その中の誰かのついでで、美術教育の現場見学を兼ねて参加したのかも知れません。こうした制作や多くの作品鑑賞を通して、人体デッサンの重要性を悟りました。この作品は浅井の人物裸体の習作的作品として貴重であり、異色といえます。



浅井忠《男性裸像》1901

■転職と京都への移住を決心

11月5日、博覧会が終了しました。4月のスタートから丸8カ月間続いたこの博覧会は、浅井に強い印象を残しました。この頃、パリに滞在中の東京美術学校校長、正木直彦を訪ねました。正木の紹介で中沢岩太を知り、京都で美術工芸の教授職に就く約束をしました。つまり4月にパリに到着し、その年の11月頃に、東京での洋画教授の職を辞して、京都で美術工芸を指導する約束をしたことになります。

浅井は工部美術学校でフォンタネージから洋画指導を受け、以降、洋画の習得と発展に尽くしました。東京美術学校西洋画科教授となり、文部省の命で留学してパリに居た経歴を振り返るとき、この転身は不可解に思えます。

翌年の9月に、日本にいる弟、達三に宛てた手紙では、日本社会への失望、日本美術の水準への憂い、帰国後は京都に移ることなどを記していました。*2

決心は揺るがず、1902（明治35）年8月に帰国し、翌月、一家で京都に移住して、京都高等工芸学校教授に就任しました。

■年末

図は、12月14日付、友人の建築家、塚本靖に宛てた肉筆の絵葉書です。12月5日に、部屋の同居人たちがそれぞれ用務で旅立ち、一人取り残されたこと記しています。当時ヨーロッパでは絵はがきが流行しており、

装飾性の高い優れたものも多く販売されていました。浅井たち美術家は、こうした絵はがきを収集すると共に、図のように自分で創作した肉筆絵はがきを沢山交換していました。

29日、ロンドンから工部美術学校以来の同胞、小山正太郎がパリに到着しました。旅行話を聞いている途中でしたが、浅井は語学レッスンのために退席したという逸話が残っています。

31日の様子を、日記から引用します。

大晦日と雖（いえど）も小学校を閉ぢず、小供等能（よ）く稽古す、余（浅井）も又今朝老教師に就きて学ぶ、覚へ悪しきを以て大に叱らす。*3

大晦日であっても小学校は開校していて、子どもたちはよく稽古している。自分も今朝、語学教師に就いてフランス語を学んだ。覚えが悪いので先生からお叱りを受けた、という内容です。パリで迎える初めての年末は、日本とは随分と異なっていたようです。

新年を迎え、その年の10月、和田英作とグレーに滞りました。約半年を経た3月下旬、パリに戻りました。2ヶ月後の5月にヨーロッパ周遊の旅に出て、7月、ロンドンから帰国の途につきました。

博覧会、観劇、美術館、博物館見学、アール・ヌーヴォーなど、パリでは優雅で充実した日々を過ごしたといえます。なかでもアール・ヌーヴォーとの出会いは、洋画家、浅井忠の活動を転換させるほどの大きな意味を持ちました。

（学芸員 中松れい）



浅井忠「塚本靖宛絵はがき」1900

*1 池辺義象「海の内外」

『木魚遺響』明治42（1909）年 芸艸堂 p179

*2 この手紙は現在、所在不明であるが、浅井の弟子、石井柏亭の著書『浅井忠』昭和4（1929）年 芸艸堂で紹介されている。

*3 この一文は、「巴里寓居日記」より引用。



千葉県立美術館

〒260-0024 千葉市中央区中央港1-10-1

電話 043-242-8311

http://www.chiba-muse.or.jp/ART